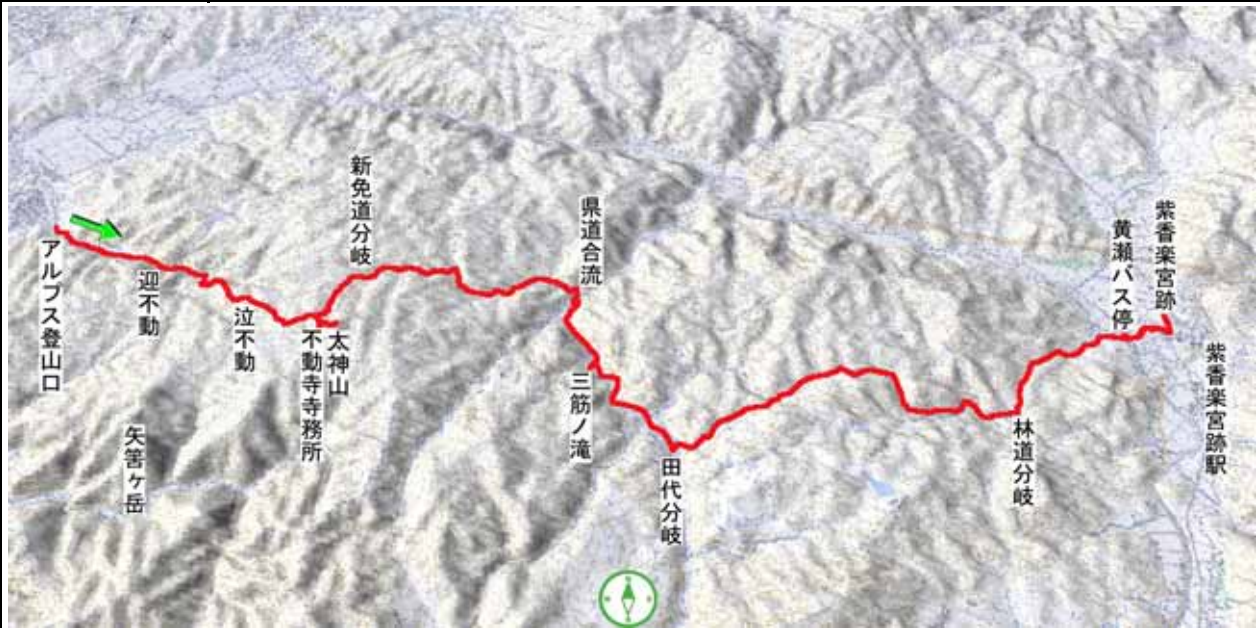


健康登山49:自然歩道27 (アルプス登山口～紫香楽宮跡)

コース	アルプス登山口 2.0km/36 点 0.2km/6 4.2km/78	迎不動 1.7km/54 不動寺寺務所 5.0m/80 林道分岐 2.8km/48	泣不動 1.2km/39 三筋ノ滝 1.6/25 紫香楽宮跡 0.8km/17	太神山三角 田代分岐 黄瀬バス停
水平距離	19.5km	断面図 縦軸：高度m 横軸：距離km		
水平換算距離	19.2km			
累計高低差	登り834m、下り685m			
標準歩行時間	6:23			
実績歩行時間	6:06			



山行報告

山行日 2009・7・2 (金) 天候 曇り 参加者 9名

アルプス登山口9:30 迎不動9:58 泣不動10:55 太神山三角点11:33 不動寺寺務所
 行動 前昼食11:48～12:16 新免道分岐12:33 県道12号13:15 三筋ノ滝13:40 田代分岐
 14:10 林道分岐15:25 紫香楽宮跡16:20 黄瀬バス停16:36 石山駅17:30

記録

梅雨時の山歩きは天気次第であるが、幸い雨も止み照らず降らずで気持ちよく歩けた。石山駅からアルプス登山口まではバスで行き、富川道分岐までは先月と同じ道を歩いた。今回は天神川沿いの道を直進し、迎不動を過ぎると間もなく林道と別れて不動橋を渡り湖南アルプスらしい露岩帯の七曲りの登りになる。歩き始めて1時間になるので途中にある祠の前で水分補給をした。

泣不動や矢筈ヶ岳分岐を過ぎて二尊門で小休止。ここから不動寺山門や本堂に至る石段を通過して、太神山三角点まで登った。本堂にお参りした後、寺務所前の休憩所で昼食をさせてもらった。途中にあるお不動さんやお地藏さんがすべてきれいに掃除され、お花が供えられていて信仰の山だという思いがした。

午後の行程は14.5kmと長いが、見どころも少なく、林道または車道歩きなのであまり休まずに歩いた。太神山から林道に下ると、すぐに上田上の新免バス停へ下る道があった。分岐を過ぎ40分ほど林道を歩くと田代川に出た。ここから田代分岐までの2.5kmは交通量の多い県道12号線を歩かねばならないので、路肩を一列になって歩いた。途中に三筋ノ滝がありよい休憩ポイントである。

ガイドブックでは田代までを一日行程で紹介されているが、交通が不便なので紫香楽宮跡まで足を延ばした。ゴルフ場北面の杉林を通り抜けて、ひたすら林道を歩くと雲井スクスクの森という標識があり、雲井小学校学校林と書かれていた。すぐに林道の分岐点があり、標識に従って30分ほど歩くと大戸川に架かる内裏野橋に出た、ここが黄瀬バス停である。

バスの時間を確認してから、紫香楽宮跡まで往復した。バスで石山駅まで戻り18時前に京都駅に着いた。信楽鉄道の紫香楽宮址駅からJR貴生川駅を経て帰ることもできる。

自然歩道（アルプス登山口～太神山～田代～紫香楽宮跡）



出発点のバス停
アルプス登山口
9:30

七曲りを登る
10:19



泣不動
10:54

舞台造りの
不動寺本堂

11:42



不動寺寺務所前
広場にて
12:12

県道22号線を
三筋ノ滝へ向う
13:27



三筋ノ滝
13:44

田代の分岐点
14:10



林道を黄瀬へ
向う
15:00

紫香楽宮跡
16:20



名所・旧跡ミニガイド（自然歩道：アルプス登山口～紫香楽宮跡）

参考資料、HP、その他より

湖南アルプス：湖南アルプスは滋賀県の南部に位置し、瀬田川にそそぐ大戸川を境に、金勝アルプスと、田上山系とに大別される。

この一帯は、花崗岩の岩塊が露出した小起伏の頂がいたるところにある。そのため、アルプス的景観に似るため、大正十年頃京都山岳会会員によって湖南アルプスという名が生まれた。

田上鉱物博物館：水晶、トパーズ、長石など41種類にのぼる1000点ほどの鉱物が展示されている。帝産バス枝バス停徒歩3分、事前申し込み制。有料300円。田上山系の山は、平城京造営などで多くの用材伐採で禿山になったとされ、花崗岩露出した独特の景観をもつ。明治期から花崗岩鉱物(ペグマタイト鉱物)の産地として。恵那地方、福島県石川地方とともに日本三大産地に数えられた。

水晶は飾り玉などとして産物になっていたが、黄玉(トパーズ)は加工に向かないため放置されていた。外国宝石商が目につけ、地元の人々を雇って拾わせ、海外に持ち出されたトパーズは、明治年間に700kgにおよんだといわれる。

迎不動：田上不動寺への参道にある石に彫られた不動尊。
最初に出会う不動尊のため迎不動と呼ばれている。

泣不動：参道脇の岩に掘られた不動尊像。
泣いているように見えるので、泣不動と呼ばれている。

二尊門：参道に石像仏が二像あり二尊門といわれる。
この石像は不動明王の眷属で八大童子のなかの二童子の石像で、向かって右は、矜羯羅童子(コンガラドウジ)、左は、制多迦童子(セイタカドウジ)
この二尊は不動明王の脇侍として通常は三尊一緒に祀られています。

不動寺：本尊は不動明王。田上(たなかみ)不動の呼び名で親しまれている。
貞観元年(859)天台宗、智証大師円珍の創建。近江園城寺造営中、田上山に紫雲がたなびき、金色の光が園城寺を照らした。円珍は不思議に思い田上山に登ったところ、一人の老翁に出会った。老翁いわく「この林の中に霊木がある、その霊木に不動明王を彫り岩窟に安置すればこの山は霊地になる」といった。
そこで円珍は不動明王を彫り岩窟に安置しそこに不動寺を建てたという。

本堂は室町時代前期の建築、背後の岩窟に仏間が造られ懸造(かけづくり)で小規模な本堂ながら舞台造の特色を持っています。屋根は寄棟造の檜皮葺き、正面の唐破風の玄関や礼堂は後世に増築されたものです。

太神山 : 湖南アルプスの主峰、 標高 599.7m 二等三角点

大正時代までは田上山(たなかみやま)の名で通っていた。一説では、太神山は農耕の神(田の神)として信仰を集め、これが地域の地名となって田上(たかみ)の字をあてるようになったという。

往古はスギ、ヒノキ、カシなどの原生林であったが、奈良、平安時代の相次ぐ都の造営や寺院建立のために用材を切り出し、筏に組み、瀬田川を運搬手段に搬送した。山林乱伐だけでなく、陶土採掘などで田上山一帯は禿山になり水害の要因でもあった。

江戸時代 1660 年「木根堀取禁止、土砂留苗木植込令」、明治 6 年になると「淀川水源砂防法」がだされ、明治 11 年内務省直轄の砂防工事が行われた。

オランダ人技師ヨハネス、デレ - ケの指導のもと堰堤など近代的な溪流工事が取り入れられ、徐々ではあるが確実に回復しているという。

【田上/タナカミ】旧瀬田村の東南に上下の田上村がある。

タナカミの「タ」は、多分に瀬田村の田の上(かみ)にある、という意味であったであろう。田上山は太神山、田神山などとも書かれ、万葉集にも歌われた古い山なのだが、田の神として仰がれるような意味では決してない。また地形がタナ(棚)状をしている、というものでもない。タナカミは文字通りで、それはセタ(瀬田)のカミ(上)ということである。(古代地名を歩く、吉田金彦著より)

三筋の滝 : 田代川にあり滝の流れが三つに分かれていることから「三筋の滝」という。三筋の白い滝が溪谷いっぱいに広がり、小さいが優雅な滝。

紫香楽宮跡 : 聖武天皇(724~749)は「藤原弘嗣の乱」を契機に、平城京を飛び出し、伊勢、尾張、近江を 2 か月も行幸。大和に帰らず、加茂の恭仁京に都を移し、また難波に移る。

そして天平 17 年(745)正月、紫香楽を皇都として宣言した。しかし度重なる遷都の負担に、民の苦しみが大きく、藤原氏ら実力者官人も反対。その上、山火事、地震など災害も頻発し、僅か 5 ヶ月で廃都され、聖武天皇は 5 年振りに平城京に還られた。

紫香楽を大仏建立含む仏都にと思ふ聖武天皇の悲願の挫折の跡が「宮跡」です。

大正 15 年、国は現在の地、黄瀬(きのせ)国分寺跡を紫香楽宮跡と史跡指定したが、昭和 45 年北隣の宮町で、工事中に巨大木柱根列を発見「告大澱所」と書かれた木簡も出土し、こちらが宮跡と発表されたが現在発掘中で指定はそのままです。

信楽の語源：シガラキということばに、あてはめた文字表記が信楽。

紫香楽と書いたり神楽と書いたりする。見た目に感じのよい漢字を選ぶのだが、信楽はこの土地柄にぴったりしている。

シガラキの語尾の「キ」に注目。ある地域を外敵から守るための防塞をキ(城、柵)という。キによって守られた土地そのものもキといった。

土地という古い意味では、カキ(垣)、サキ(埼)、ノキ(軒)、ワキ(脇)、などがうかがえ、マキ(牧)という語にもキ(道、土地)のいみがこもっている。

マキ(牧)はウマキ(馬牧)ということで、馬を飼う大事な地なのだが、これが信楽の地名にある。

そしてマキ(牧)の北にあるキノセ(黄瀬)は、キ(岐)のセ(背)ということで実際に高くなっている。

ここに聖武天皇の紫香楽宮があったといわれるが、正確には甲賀寺跡で宮跡は北の宮町で発掘中です。

言語的には、シガ(其の所)アラ(開墾してない荒々しい)キ(岐、土地)で「未開拓の荒々しい土地」という意味あった。聖武天皇の紫香楽宮造営で新しい意味にかわっていく。天智天皇の大津宮に次ぐところの新しい砦《近江の新都》たる抱負があったようで、シガ(志賀)アラキ(新城)の意味となっている。シガラキ(信楽)は聖武天皇に則して言えば、《志賀の新しい第二の都》という意味なのである。

(古代地名を歩く、古田金彦著より抜粋)